

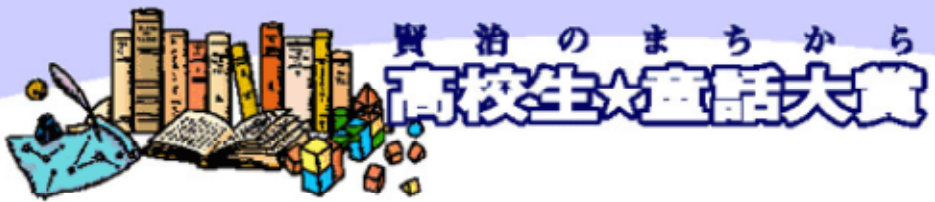
第 14 回 大賞(金の星賞)受賞作品

「うまれる」

岩手県立花巻北高校三年 小田島 夕花



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



大賞 〈金の星賞〉

『うまれる』

岩手県 花巻北高等学校三年 小田島 夕花

さく、さく。深雪が雪を踏む音に合わせて、背負ったランドセルから、チリチリともコロコロともつかない、鈴のような音がします。さくさく、チリチリ。深雪は楽しくなってきました、

「ふーゆや・す・み・が・こ・と・し・も・やーあって・き・た！」

なんて、一年二組のクラスメイトの男の子たちが歌っていた替え歌を、小さく呟くように歌い始めました。けれど、深雪がご機嫌な理由はランドセルからきれいな音が鳴ると、明日から冬休みだということだけではなく、それからもう一つ、深雪の誕生日が二日後に迫っているからなのです。

さく、さく、チリチリチリ……。弾む足取りで、深雪はいつもの帰り道はずんずん歩いていきました。

さく、さく、とん、とん。玄関の前は、朝お父さんがきれいに雪かきをしたので、雪は積もっていませんでした。深雪は靴についた雪をジャンプで落としました。それから右手の手袋を外して、コートのポケットをもぞもぞと探します。つるつるしたのはポケットティッシュだから、多分その奥に……
(あったー！)

探り当てた家の鍵でドアを開けました。

「ただいま」

小さく呟くように言ったのは、返事がないことを知っているから。靴を脱いで、マフラーを外して、それからコートを脱ごうと一度ランドセルを下ろすと、チリン、チリリン。あの音が鳴ります。深雪はそれだけでなんだか嬉しくて、早く自分の部屋でそれを手に取りたくてウズウズしてしまいます。急いでマフラーとコートをハンガーに掛けて、ランドセルを背負いなおして洗面所で手を洗って、うがいをして、自分の部屋まで駆け足で向かいました。



ふう。大きく息を一つ吐いて、深雪はランドセルを下ろしました。それからランドセルを開けて、中から小さな紙袋を取り出しました。チリチリ、コロコロ。中からあの音が聞こえます。深雪は紙袋の口を留めているシールを破かないようにゆっくり剥がして、机の上で逆さまにしました。チリリン。一際大きな音を立てて、ビニール袋に入った銀色のまあるい物と、「おたんじようびおめでとう」と書かれたカードが出てきました。深雪はビニール袋をそつとつまんで、揺らしました。チリチリチリ……。深雪はにんまり笑いました。

(星の卵、だって)

ほしのたまご。なんて素敵な響き！ 穴が開いていない鈴のようなこの卵は、明日から家族で旅行に行くというクラスメイトの奈々ちゃんが先回りしてプレゼントしてくれたものです。

(塩水に沈めて三日くらいで生まれるんだっけ)

深雪はビニールを開けて、卵と一緒に入っていた紙を取り出しました。広げるとノートと同じ大きさになったその紙には、丸い文字で

「星の卵の育てかた

コップ一杯の水(約二百ミリリットル)に塩一・七グラムを加え、一口飲んでから卵を沈め、月光に当てることを毎日繰り返してください。三日ほどで卵からかえり、空へ昇っていきます」

と、イラスト付きで書いてありました。三日でかえるなら、深雪の誕生日にちようどピッタリです。誕生日に星が生まれるなんて、なんて素敵なんですよ！ 深雪は早速今晚から星を育てることに決めました。

お母さんが帰ってくるまでは宿題の時間と決めていて、いつもはきちんとそれを守っている深雪でしたが、今日ばかりは宿題なんて手につきません。卵が目につくと指でつん、とつについてはチリチリと透き通るようなその音に耳を傾けているのでした。

ガチャン、バタン。玄関のドアを開けて閉める音と、少し遅れて「ただいまあ」というお母さんの声が聞こえました。お母さんはそれからずんずん深雪の部屋の前までやってきて、

「深雪？ 開けるよ」



と言って、ドアを開けました。ただいま、と顔をのぞかせたお母さんが言ったので、深雪がお帰りなさい、と返すと、卵もそう言っているかのようにはりりん、と鳴りました。お母さんが部屋へ一歩入ってきて、

「何？ それ。いい音」

と尋ねてきたので、深雪はほんの少しうつむいて、

「ほしのたまご」

と、なんだか少し恥ずかしくなってぼそりと答えました。

「え？ 何？」

お母さんは深雪のところまでズンズンズカズカやってきて、卵をひよい、と摘み上げました。チリリン。卵が鳴ります。

「星の卵。奈々ちゃんが、誕生日に、って」

さつきよりは少し大きな声で深雪が言うと、あらそう素敵ね、ちゃんとお礼をするのよ、とあまり興味がなさそうに返されました。深雪は少しガツカリして、小さく溜息をつきました。お母さんはつまんでいた卵を机の上に返して

「お父さんが帰ってきたら夕飯ね」

いつものセリフを口にするので、深雪もうん、いつものように返しました。お母さんに言いたいことがもっとあったと思うのですが、なぜだか全部ひっこんでしまって、深雪はお母さんの背中を見送ることしかできませんでした。

その夜、深雪は寝る前にキッチンへ行って、ガラスのコップに水を注いで、塩をキッチリ・セグラム量って加えました。よく混ぜて一口飲むと、口に入れた途端にスツと身体に入っていくような、そんな不思議な感じがしました。思ったよりはしょっぱくなくて、すぐに身体に馴染む感じ。

(なんだか、懐かしい、ような)

けれど深雪はどこでこれと同じようなものを飲んだかは思い出せません。まあいいかと一息を吐いて、コップを持って自分の部屋へ向かいます。卵をコップの中へ沈めると、なんだか銀色のまりものように可愛く見えます。月光に当てるためにカーテンを開けると、やっぱり少し寒くて、ベッドの宮



に目覚まし時計と並べて卵を置くと、深雪はコロンと横向きに丸まったような体勢で目を閉じました。

深雪の枕元では、月光を浴びた卵が、いずれ自分が昇っていくことになる夜空を見上げて淡く輝いていました。

深雪は夢を見ました。どこか真っ暗で温かい、この上なく安心できるところで、深雪はじっとしていました。どこからかお父さんとお母さんの声が聞こえます。何を言っているのかはわかりませんが、その声はどこまでも穏やかで、優しく、深雪はとても幸せな気持ちでした。

そんな夢を、深雪は朝起きてからも鮮明に覚えていました。今日から冬休みだからそんなに早く起きる必要はないのに、お母さんに布団をはぎ取られて、震えながら廊下を歩きながら、深雪は、変なの、と思いました。

(起きててもこんなにくつきり覚えている、そんな夢を見たことなんていままであつたかしら?)

次の夜も、深雪はコップの水を一度捨て、また塩水を作って一口飲みます。身体にスツと馴染む感じがするのは、きつと前にどこかで飲んだから。じゃあ一体どこで? 答えはその夜も出ません。深雪は前の夜と同じようにコップを置いて、丸くなって眠りにつきました。卵は今日も月光に照らされて、コップの底でキラキラ蹲っていました。

そして深雪は、また同じ夢を見ました。暗くて、温かくて、優しい、幸せなあの夢です。やっぱり起きてからも鮮やかに思い出せます。

(変だわ)

深雪は俯いて考えます。変な夢を、一日連続で見るなんて本当に変です。温かくて暗い、あんな場所を深雪は知りません。知らない場所をどうして夢に見るのでしょうか? 答えは出ません。悪夢じゃないだけマシだわ、と結論付けて、小さく欠伸をしました。大体、今日はそんなことに時間を取られるわけにはいかないのです。

(だって、今日は誕生日だもん)

そんな日に楽しくもない考え事に時間を使って一体何の得があるでしょう?



誕生日は楽しいことで頭をいっぱいしておくのです。寒い冬の廊下を、朝ごはんを食べに足取り軽く歩きます。向こうからお父さんが大きな欠伸をしながら歩いてきます。深雪は小走りに寄って行き、

「お父さんおはよう！」

と声をかけました。お父さんは欠伸交じりに

「おはよお」

と返します。それだけ？ 何かほかに言うことは？ と深雪が尋ねると、お

父さんは、さあ、ほかに何かあったっけなあ、ととぼけました。深雪がふん、とそっぽを向くと、お父さんは慌あわてて、

「嘘うそだよ。お誕生日おめでとう」

と言いました。深雪は満足してダイニングのドアを開けます。中ではお母さんが目玉焼きを焼きながらお父さんと自分のお弁当を作っていました。

「お母さん、おはよう」

深雪がお母さんの背中にそっと声をかけると、お母さんはテキパキ働はたらきながら、

「おはよう。悪いんだけど早く食べちゃってくれる？ お母さん今日ちよっ

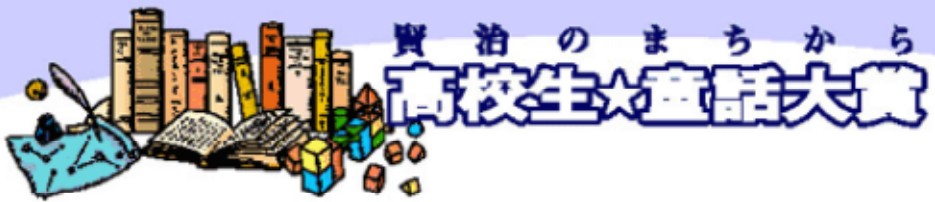
と急ぐから」

と言いました。お父さんと深雪は向かい合ってご飯を食べました。お母さんからの「おめでとう」は夕方か夜になりそうです。深雪は少し寂しい気持ちでごちそうさま、と手を合わせました。

今年の誕生日は残念ながら平日だったので、お父さんとお母さんが仕事へ行ってからは、深雪は午前中は宿題、午後は友達と遊ぶという、冬休みの何でもない日の過ごし方をしました。一緒に遊んだ子たちからは沢山の「おめでとう」をもらって、遊び尽くした深雪は雪まみれで夕方家へ帰りました。

雪を払って玄関を開けて、ただいまと言っても返事をくれる人が居いないのはわかっていましたが、それでもやっぱり気持ちはしぼんでしまします。しぼんだ気持ちのまま手洗い・うがいをして自分の部屋に入ると、目覚まし時計の隣の卵は昨日とも一昨日おとといとも変わらずコップの底に沈んでいました。

(ただの鈴だったのかな……)



深雪の気持ちは更にしぼんでしまいます。折角の誕生日なのに。深雪は深く溜息をついて、ふと窓を見ました。外では雪が音もなく降り始めていました。

ガチャン、バタン。玄関のドアが開いて閉まる音がしました。お母さんでしようか。今日はずいぶん遅かったな、と思いながら、深雪は玄関へ向かいます。お母さんに「おめでとう」を言ってもらうためです。

「おかえり」

ただいま、と答えたのはお父さんでした。左手にはケーキらしき箱。

（お母さんのほうが遅い？）

なんだかおかしいな、と深雪は思いました。お父さんは箱を深雪に預けながら深雪が答えると、お母さんは？ ときました。まだ、と首を横に振り母さんが遅い理由を知らないようです。

「まいったなあ」

どうしたんだろうね、と深雪とお父さんは顔を見合わせました。「玄関は寒いし、とりあえずリビングでテレビでも見てゆっくり待とう」とお父さんが靴を脱いで言うので、ケーキを冷蔵庫にしまって、二人はのんびりお母さんを待つことにしました。

それから三十分ほど経ったでしょうか、ピルルルル、と電話が鳴りました。お父さんが受話器をとって電話に出ました。会話の様子から、相手はお母さんらしいということがわかります。お父さんは電話に向かって、えー、とか本当に？ とか言っていました。何かあったのでしょうか。深雪は不安になりながらお父さんを見つめていました。

「お母さんな、ひどい雪で帰り道が埋まっちゃってるみたいで」

だから先にご飯食べてって。電話を切ったお父さんは深雪を振り返りながら言いました。

「カレーでも作るか」

お父さんはやたらと明るく言いました。

「お父さん、料理できるの？」

深雪はお父さんが料理をしているところを一度も見たことがありません。



「できるできる！ お父さんはなあ、お母さんと結婚する前は毎日自分でご飯つくってたんだ」

わはは、と笑いながら、お父さんはキッチンへ向かいました。それから二人は、お父さん特製の、ちよっと辛いカレーを向かい合って食べました。特に会話はなくて、スプーンとお皿の音がやたらと響きます。

「深雪が生まれた日も、こんな風に雪がどっさり降ってたなあ」

お父さんが不意に呟きました。深雪がふうんというとき、お父さんはしみじみ、といった様子で続けました。

「お父さんな、出産に立ち会おうと思って張り切ってたんだけど、お母さんに『気が散るから来ないで』って言われて、ずっと廊下で待ってたんだよ。中からはお母さんの苦しそうな声が聞こえてくるしー」

お父さんはずっと話し続けました。深雪が生まれた日のこと。名前の由来。全部話してから、ふう、と大きく息を吐いて、呟くように言いました。

「お母さん、遅いな」

「そうだね。……ケーキ、明日にしよう」

結局、お風呂に入って寝ることになりました。これでは本当に冬休みの何でもない一日と変わりません。深雪は自分の部屋をぼんやり見まわしました。

(卵もかえないし)

やっぱり、本当にただの鈴だったのでしょか。これ以上待っても無駄なのでしょか。深雪は悩みました。あきらめる？ それとももう少しねばってみようか。

(……今日で終わり。今日水をかえて生まれなかったら、あきらめよう) そう決めて、コップを手に部屋を出ました。口にした塩水は、微かに悲しい味がしました。

それから深雪は、今夜もベッドの上でまあるくなって目を閉じました。

深雪は夢を見ました。いつもの暗くて暖かい場所です。けれど今日は、深雪はなんだかうずうずしていました。

(早く、早く)



深雪はそうするのが正解だと知っているように、何の迷いもなくぐるりと回転して、なんだか狭いところに頭から入って行きました。遠くでお母さんの苦しそうな声と、知らない男の人と女の人の声がします。

(早く、早く)

ゆっくり、ゆっくりと深雪は進みます。お母さんの声は進むたびに更に苦しそうになっていきます。

(早く、早く)

ーここから出ていかないと。くるくる回りながら、深雪はじれったいほどにゆっくり進みます。ひー、ひー、ふー。お母さんの不思議な呼吸音が聞こえてきます。ひー、ひー、ふー。合わせて深雪も進みます。ひー、ひー、ふー。ひー、ひー、ふー。不意に頭が狭さから解放されました。

(あとちょっと、あとちょっとでー)

知らない男の人の声がして、深雪の頭に何かが触れました。ひー、ひー、ふー。ひー、ひー、ふー。ゆっくり、ゆっくり、肩、お腹、足と、深雪は生まれ出てきました。ふわり、と誰かに持ち上げられた感覚。深雪は違う、と思いました。

(違う。これはお母さんの手じゃない！)

お母さん、お母さん！ 深雪は必死に叫びました。お母さん！ 叫びながら深雪は温かい液体の中にどぶん、とつけられて、何か布のようなもので拭ぬぐわれました。その間中お母さん呼び続けました。宥なだめるような女の人の声がしましたが、そんなのは関係ありません。お母さん！ 不意に深雪は温かい何かの上に下ろされました。あ。何の根拠こんぎよもなく、でも確信かくしんをもって深雪は思いました。

(お母さんだ！)

お母さんはゆっくりと深雪の背中せなかに手をまわして、泣いているみたいな声で何かを言いました。

ガチャン、バタン。玄関のドアを開けて、閉めるような音で深雪は目が覚めました。ふと見上げた空は、青と藍色あゐの絵の具で作った色水のような、透明に青い色をしていました。時間を見ようとベッドの宮を見ると、コップの底で、月光が取り残されたように卵やわが柔らかく光りながら蹲すわっていました。



「あ、」

ふらふらと卵が揺れて、光が徐々に徐々に表面の一点に集まっていきました。そして、光と卵が完全に分かれた次の瞬間。
シュン。

光の尾を引いて、何かが窓を突き抜けて空へと昇って行きました。深雪の星です。深雪は何も言えず、ただポカンと星が飛んでいった空を見つめていました。

思い返せば、あの夢は卵を育てるようになってから見るようになったのでした。

(だからきっと、あの夢は卵が見せたんだわ)

それは自分を育てる母である深雪への、たった一つの星の恩返しでした。

トントン。誰かがドアをノックしました。ハッと深雪が我に返ってドアを開けると、そこにいたのはお母さんでした。深雪はさっきの夢を思い出しました。あんなに苦しうにしながら、深雪を産んでくれた、お母さん。深雪はぎゅう、とお母さんのお腹に抱き付いて、頭をぐりぐり押し付けながら、「産んでくれて、ありがとう」

と呟きました。思った以上に泣きそうな声が出て、深雪はなんだか恥ずかしくなってさらに頭を押し付けます。お母さんは一瞬びっくりしたように動きを止めて、それからゆっくり深雪の背に手をまわして、

「いいえ。こちらこそ、生まれてきてくれて、ありがとう」と、ゆっくり、かみしめるように言いました。

明け方の空へ昇った星はどこかへ消え、深雪の部屋の窓から日が差ししてきました。明るくて、冷たくて、清らかな、深雪が七歳になって初めての、朝です。